

# 発明文化論

〈第92回〉

丸山 亮

## 画法の共時性

先日、日比谷図書文化館でマリー・アントワネットやジョゼフィーヌに仕えた宮廷画家ルドゥーテ（1759～1840）の「美花選」展を見た。そのとき洋の東西で画法に共通するところがあるのに気付いて、なぜだろうと思った。

ルドゥーテという画家は、ベルギーのフランス語圏サンチュベールで画家の家系に生まれている。まず父親から絵を学び、若いころネーデルランドで修行しながら腕をみがいて、パリへ出ていく。そして植物図譜など、花の絵を得意とするようになり、フランス革命の動乱期を生き抜いて、「花のラファエロ」や「バラのレンブラント」呼ばれるまでになった。

出展された「美花選」は1827年に刊行が開始され、完成に6年かかった多色刷りの版画集を1枚ずつ額装して見せるもので、絵が醸し出すほんわかとした質感がいい。画題にはバラのほか、椿、あじさい、チューリップ、牡丹やすみれなどが単独で、あるいは組み合わせられ、さらに蝶などの動物を配したものもある。ヨーロッパはもちろん、日本にもルドゥーテの愛好家は多いようだ。彼が描いた画譜は版画にとどまらず、やがてチェンバロのような楽器や茶碗の絵付にも採用され、デザインが独り歩きしていく。

さて、この版画は、針で銅版に無数の点を刻印し点の粗密で濃淡を出す点刻彫版法という技法を用い、画像の輪郭線を省いている。ルドゥーテの点刻彫版法は、ロンドンに滞在していた折、キュー王立植物園の植物を描く際に見聞したイタリア人フランチエスコ・バルトロッチの技法に由来するといわれる。版下の絵をルドゥーテが描き、刷りはラングルワという工房に委ねているので、この分業は浮世絵の版画に通じるところがある。

展示は版画だけでなく、ベラムと呼ばれる子牛の皮に描いた肉筆画が数点あって注目された。紫と黄色のパンジーなどは、絵具の発色が鮮やかだ。ここで日本の浮世絵師たちも手掛けている肉筆画を思い出した。彼らは浮世絵の版下画を描いただけでなく、折に触れて掛け軸ともなるほどの大きさで、肉筆画を描いた。ルドゥーテとほぼ時代の重なる葛飾北斎（1760～1849）にも、いくつかの肉筆画がある。もちろん描いたのは紙や絹布の上で、ベラムとは絵具の乗りが違うが、多色の鮮やかさではひけをとらない。

浮世絵の錦絵は木版技術の粋を凝らした多色刷りで、点刻彫版法とともに、どちらも濃淡の表現には向いていた。錦絵ではルドゥーテの「美花選」にさかのぼること半世紀、鈴木春信が、着物や帯の繊細な模様とともに、輪郭線を描かない女性を世に出している。

北斎はもともと探究心の旺盛な画家で、和漢洋の画法を貪欲に吸収した。彼の図案集「北斎漫画」は近代マンガの先例にあげられるほど有名だが、その中に「三ツワリの法」という透視画法を説明したものがある。この遠近法は「富嶽三十六景」のシリーズにも応用され、彼に西洋画の画法がどれほど浸透していたかを示している。

長崎を経由してオランダからもたらされた書物や絵画は、西洋画法の目新しさで、当時の日本の画家を強く刺激したと思われる。谷文晁のように輸入されたオランダ画を模写した油絵を残している画家もいる。一方、輸出される陶磁器の包み紙としてヨーロッパに渡った錦絵は、やがてかの地で画家たちの熱狂を引き起こした。それはモネ、ゴーガンや、オランダ出身のゴッホら印象派の画中に、模写に近い形で取り込まれることになる。画法をめぐる洋の東西の並行関係が興味深い。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）